

「それから」読書メモ

明治42年（1909年）6月から朝日新聞に連載された。定職を持たず、30歳になっても父親の援助を受けて生活している青年・長井代助。一軒家を構え、書生と下女を雇って優雅に暮らす「高等遊民」の彼の前に、かつて愛情を抱きながら、義侠心から友人・平岡と結婚させた三千代が現れる。代助は「自然の児」として生きることを決め、人妻である三千代を平岡から奪う決意をする。

この作品では、代助をはじめとする登場人物が、山の手から下町へとあちこちを行き来するが印象に残る。漱石は彼らの動きを丁寧に描写し、明治末年の東京の姿を描きだしている。父親から勘当され、すべてを失った代助が東京の街へと飛び出していくシーンは鮮烈だ。

この作品は、明治42年6月から10月まで「朝日新聞」に発表された。漱石は予備門時代の旧友である当時満鉄総裁の中村是公から突然満州旅行を誘われて、急いで書き上げたのである。

この作品を書くにあたって、綿密な見取り図、作品の構成全体がノートに記されている。骨格がすでにできていたのである。あとは、いかにその骨組に上手く肉付けするかが問題であった。しかし、前述のような事情から、その肉付けが足りずに、裸の骨格、すなわち、観念が露呈した状態になってしまったままであるという批評もある。

この作品では、明治末期という時代もあって、主人公の「代助」の中にインテリジェンチヤの模型を創造しようとしたが、ぎこちない人物像になってしまったことは否めない。また、ここでの男女の新しい愛と心理と運命、結婚のあり方を追求した。それは、「門」に発展的に引き継がれている。「三四郎」「それから」「門」は、一つの問題意識を追求する青春小説三部作と呼ばれるゆえんである。

明治のジェネレーション

北原白秋 「邪宗門」 空に真っ赤な の色、、、 虚脱感
国に役立つ人間としてゴールに立つ

作品の背景

漱石、世紀末ロンドン留学から帰国、倦怠感、虚脱感 虚無感のなか

作品の人物関係

主人公、代助、30歳、親父、兄夫婦のすねかじり、高等遊民

平岡の細君三千代からの借金の無心に（500円）、——>代助は、嫂に相談、200円を調達——>三千代に金を届ける

目を覚ました代助の枕元に八重の椿が一輪落ちていた。
やはり、春に始まり、春の終わりにおわる
象徴する椿の花と鈴蘭（谷間のゆり、青春、幸福、死）
三千代は、ユリを持参し、大助を訪ねる（ユリの花言葉、欲望）
コップの水を飲む儀式
代助、嫂の進める縁談を拒絶——>夕映え
停車場、ユリを買い求め、三千代とやり直す覚悟
三千代を向かえ、告白
三千代「あんまりだわ、」涙。「w h y ?」、「残酷だわ」、
そして、「もう少し早く言ってくれれば」
代助、覚悟、罪を知る

「焦る、焦る」と歩きながら、電車で飛び乗り、今度は「ああ動く、世の中が動く」
郵便ポスト、真っ赤な風船——赤い色が片っ端から代助の頭の中に飛び込み、ついに世
界中が真っ赤に染まった。代助は、自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗っていこうと決心
した。

男女の新しい愛と心理と運命、結婚のあり方を追求した。それは、次の「門」に発展的
に引き継がれ、「三四郎」「それから」「門」は、ひとつの問題意識を追及する青春小説三部
作と呼ばれる。

あらすじ

長井代助は30になって無職、家族の金で裕福に暮らしている。友人平岡常次郎の妻三
千代は共通の友人の妹で、平岡に彼女を取り持ったのは代助だ。銀行を辞めた平岡が妻と
共に関西から戻ってきた。ある日、三千代が1人で金策を訪れる。夫婦には平岡の道楽、
高利の借金に三千代の心臓病、子どもの死という事情があった。三千代を満足させてやり
たくて、代助は兄嫁に頼み、二百円を融通する。心待ちにしていた三千代が大きな百合（ゆ
り）の花を提げてやってきた——。

長井代助は親の金で不自由なく暮らす「高等遊民」。旧友の平岡と妻三千代が3年ぶりに
関西から帰京した。彼女は学友の妹で、2人を取り持ったのは代助だ。借金、平岡の道楽
などで変容する夫婦関係……再会した代助と三千代に、元々抱いていた互いへの思いがよ
みがえってくる。一方代助には資産家の娘との縁談が進んでいた——。

それから

大学での学歴をもちながら職に就かず、親がかりの生活をしている三十歳の長井代助は、食うための労働を軽蔑し、日本の文明開化を下劣なものとして批判する。だが、そんな代助には旧友平岡常次郎の妻である三千代への忘れられない想いがあった。平岡が関西の銀行を辞め、職探しのために上京してきたことにより、代助と三千代は再び出会うことになる。漱石の三角関係の恋愛劇が、濃密かつ明確な形を表した前期三部作の中心の作品。

数年前に帝大を卒業したが、食うための職業を軽蔑し定職に就かず、実業界で羽振りのよい父の保護を受けながら優雅な遊民暮らしをしている長井代助。そんな彼が旧友・平岡常次郎と再会することで物語は動き出す。関西の銀行で詰め腹を切らされた平岡の窮状を妻の三千代から聞かされた代助は、借金返済の金策に奔走する中で、かつて自分が抱いていた三千代への愛を断ち切れていないことに気付いて、平岡から彼女を奪うことを決意する。

許されない不義理に、父や兄から絶縁を言い渡されるも、代助はあらゆる忠告や軽蔑を無視して、世間の荒波に飲まれていく。

「それから」 七より、十より、十四より

「それから」は漱石が書いた最もロマンチックな恋愛小説と言ってよいだろうが、代助の心を奪う女、三千代の姿には少々怪しいものがありやしないか。

「丸裸の骨ばかりが残ったところに、夕方になると鳥がたくさん集まって泣いていた。」三千代の棲む家からどうしてこんな「墓場」のごとき場所が見えねばならぬのか。三千代という女には、摩的なものの匂いが、強烈な百合の香りとともに漂う。

明治期の結婚は1898（明治31）年の明治民法を機に大きく変化した。

湯沢雍彦「明治の結婚 明治の離婚」に詳しい。以前は、婚姻は慣習に従い証人立ち会いのもと儀式を行うことで成立する考えだったが、法制定によって戸籍吏へ書類を届けるだけで成立すると簡略化された。

近代化が進み、仕事を求めて人々の移動が激しくなると、結婚をあっせんする者の役割が大きくなった。結婚相談所も出来始め、86（明治19）年の大阪朝日新聞には「品行方正にして和洋の学を修めたる婦人に限り至急応答者を望む」などと求婚広告も載っている。

漱石は95（明治28）年、妻鏡子と見合いの席で出会った。歯並びの悪さを隠さずに

いる鏡子の姿が気に入ったという。鏡子が事前に漱石の写真を見た印象は、上品で穏やかな顔立ちで「ほかののをどっさりみてきた目には、ことのほか好もしく思われました」（夏目鏡子「漱石の思い出」）。

2人は翌年結婚。親友正岡子規は「藜々（しんしん）たる桃の若葉や君娶（めと）る」という句を贈って祝福した

変わる和装の素材

明治期の普段着は和装が基本。洋装は主に官僚や軍人、事業に成功した実業家らごく一部だった。

ただ素材は、木綿や高級な絹から変化がみられる。平岡が着たネルは肌触りがよく明治後半に普及。銘仙という、廉価な絹糸（玉糸）の着物も、中流層にまで広まる。染織業史に詳しい埼玉大の田村均教授によると、欧米向け生糸の生産増に伴い、玉糸も大量に発生したからという。

化学染料の登場などで、多彩な色づかひの模様織物にも人気がでた

恐るべき腸チフス

三千代の兄と母の命を奪ったチフス（第36回）。腸・発疹チフスは明治13（1880）年、伝染病予防規則で届け出が義務づけられた。秦郁彦「病気の日本近代史」によれば1905年、腸チフスは患者2万2853人に対し死亡者は6280人だった（同年赤痢は患者3万7981人に対し3762人死亡）。「恐るべき腸窒扶斯（チフス）」（06年）などしばしば新聞でも話題に。代助の家には専用水道があるが、不衛生な水が病因の一つとして上下水道の整備が急務とされた

代助が新聞で目にした「日糖事件」（第41回）。担当検事の小原直「小原直回顧録」に詳しい。砂糖の輸入関税を一部返却して製糖業者を保護する法律の失効が迫っていた。大日本製糖取締役らは期限延長を求めて、議員計20人に多額の金を贈与した。

漱石も日記に「重役拘引、代議士拘引。天下に拘引になる資格のないものは人間になる資格のない様なものぢやないかしらん」と記している

それから あらすじ

1-3

目覚めた代助は畳の上に落ちたツバキの大輪を見た。寝ながら胸に手を当て、紅の血が流れる心臓の鼓動を確かめるのが癖だ。身支度に気配りし、朝食に熱い紅茶とバター付きパンを食べる。本を読み、音楽を聴いて暮らす若い独身の代助は、あのように「遊んでいたい」と居候の門野から言われている。肉体仕事を条件に書生になったのんきで怠惰な彼との会話はいつも門野の口癖「そんなもんでしょうか」で終わるのだ。

4-8

中学からの知り合い、平岡常次郎が訪ねてきた。一時は親しく行き来していたが結婚し、銀行の京阪地方の支店に赴任した。近頃は疎遠になっていたが、代助には忘れるわけにはいかない事情があった。2人は大いに飲み議論し「贅沢な経験をしなくっちゃ人間の甲斐（かい）はない」と主張する代助に「何時までもそういう世界に住んでいられれば結構さ」と平岡は言う。そして支店長のために使い込みを穴埋めし、辞職・帰京に至った状況を語る。

9-13

代助は平岡から兄・誠吾の会社への世話を頼まれ、子どもを亡くした平岡の妻・三千代の様子を尋ねる。代助の父・長井得はかつて藩の財政整理に携わり、その後実業界で成功、代助の兄とその妻・梅子、その子・誠太郎と縫と暮らす。最高の教育を受けながら本家の金で暮らす代助に父は、三十過ぎで「遊民」とは「如何（いか）にも不体裁」などと説法するが、「職業のために汚（けが）されない」ことを上等と考える代助は適当にかわし、議論にもならない。

14-18

代助は兄嫁の梅子から、長井の家に因縁深い資産家の娘との縁談話を聞く。家中での斬り合いに巻き込まれた若き伯父、父が切腹を免れたのはその縁者の奔走による。そのような死に直面した話は代助には勇ましいより「怖（こわ）い方が先に立つ」。多忙な平岡に代わり、家探しを請け合った代助は書生の門野に適当な家を見つけさせた。明日引越しをするという。

19-23

引越しの前日、三千代が1人で訪ねてきた。色白に黒髪、二重の黒いうるんだ目が印象的だが、子どもを亡くしたあと心臓病を患い、それが悪化したわけではないのに血色が悪い。帰京前につくった借金の工面のため、平岡に言われてやってきたのだった。青白い三千代を眺め、代助は「漠然たる未来の不安」を感じる。引越し当日は荷物の引き取りから荷ほどきまで門野を手伝いに行かせた。

24-27

シルクハットにフロックコート姿で園遊会に出かけた代助は兄に会う。常に多忙な兄と園遊会を抜け出し向かった鰻（うなぎ）屋で平岡夫婦の借金話を持ち出すが、断られてしまう。平岡の就職についても「そういう人間は御免（ごめん）蒙（こうむ）る」。兄弟の縁だけでは動かない兄を不人情に思う気持ちは起こらない。門野との間で、新聞連載小説『煤

烟（ばいえん）』が話題になった。

28-32

代助は落ち着かない。連載小説「煤烟（ばいえん）」はためらう自分と主人公を比べてしまい、読み続ける気がしない。平岡の新居を訪ねると、三千代が荷物から平岡とそろいで仕立てたという赤ん坊の着物を取り出した。酒を飲みながら昔のように議論を始める。以前と違い代助はめっきをはがし真鍮（しんちゅう）のままていようと心がけてきた。しかし平岡は、失敗しても働く自分を笑っている、考えるだけで意志を発展させることがない、昔とすっかり変わってしまったと代助を攻撃した。

33-37

一等国の仲間入りしたい日本、精神的にも健全でないこの社会で自分一人が何をしてもしょうがない、と言う代助に平岡は、生活に困らないからそう言えるのだと反論する。三千代は学友菅沼の妹で、代助と平岡は兄妹の家に遊びに行ったり、4人で散歩したりした仲だ。菅沼とその母が相次いで亡くなった後、三千代と平岡の間を取り持ったのは代助だった。平岡の事情はともかく、いま心細い状況の三千代のために、なんとか金の工面をしてやりたい気持ちが募る。

38-42

代助は兄嫁・梅子に借金を申し入れるが、断られてしまう。縁談話を嫌がる代助に梅子は、好きな人がいるのではと尋ねる。不意に彼の心に浮かぶのは三千代の名だった――。新聞で日糖事件が報道され、世間では大疑獄と騒いでいる。父や兄がまったく「神聖」とは思わないし、会社にも何が起きるかわからないが、いま代助が気にかかるのは三千代のこと。金策の返事を聞きに1人で訪れるのを心待ちにしていたが、音沙汰がなかった。

43-47

兄嫁からの書状に二百円の小切手が同封されていた。代助はすぐさま平岡宅へ向かう。三千代から平岡の道楽、高利な借金がもとの現在の苦境を聞いていると、経済面だけではない夫婦の関係がうかがえた。数日後、平岡が訪ねてきた。新聞社への就職を考えているという。代助はいまの平岡に嫌悪感さえ感じている。三千代に平岡を周旋したのは自分だ。後悔はしていないが、3年を経てその結果がいま平岡と自分の前にある。代助はまた父から呼び出しを受けた。

48-52

「来たか」、父は穏やかに今後の心づもりを尋ねた。独立も洋行も、父の前提となるのは資産家佐川の娘との縁談だ。そんなにその娘をもらう必要があるのかと問う代助に父は、嫁

を持たせるのは親の義務、佐川の娘でなくてもいい、こちらの都合も少しは考えたらいいいだろうと怒りをあらわにした。代助は三千代の来訪を心待ちにしていた。昼寝中の訪問を知り、なぜ起こさなかったかと門野に怒りを向けるが、すぐに戻ると聞いて機嫌を直す。

53-56

待ちわびた三千代が大きな白いユリを提げ、息をはずませてやってきた。水を取りに行き、戻ってくると、三千代はすでに水を手にしていた。スズランをつけた大鉢の水を飲んだと聞き、代助はあきれを。ユリは代助に買ってきてくれたものだという。兄の生前、代助がユリを買って訪ねたことを三千代は覚えていた。平岡は来月から新聞社勤務が決まったらしい。代助が用立てた金で借金返済せず、生活のために使ってしまったと三千代はわびた。

57-61

アンニュイに襲われたらしい。自分は何のために生まれたのか、行動の意義を疑い、代助はぼうぜんとする。自分を救う方法はただ一つ「やっぱり、三千代さんに逢（あ）わなくちゃ」。出がけに友人の寺尾がやってきた。文学を職業にしており、請け負った翻訳で分からない点があるという。結局、平岡宅へは行けなかったが、実はその前、平岡夫妻には数回会っていた。平岡は新聞社の経済部主任記者に決まったという。朝、突然、青山の実家から人力車で迎えが来た。

62-66

実家に呼ばれたのは兄嫁の歌舞伎見物のお供のためだったが、遅れてやって来た兄から幕あいに紹介されたのは佐川の娘だった。兄嫁でさえそう振る舞うなら家族と疎遠にならざるを得ない……。考えがまとまらない中で三千代を思うと安住の地を見つけたように感じる。変わらぬ愛を口にするのは偽善と考えるが、三千代を思うとその信念も揺らぐのだ。兄嫁の圧迫、三千代の引力……代助は旅に出る決心をする。おいが父の使いでやってきた。明日実家に来るようと言う。

67-71

旅に出る心が定まらないまま、代助の頭は三千代のほうに滑っていく。訪ねると三千代はランプの下、1人新聞を読んでいた。暮らしぶりを尋ねると指輪のまったくない手を見せた。代助はためらう三千代に紙入れの紙幣を渡す。翌日、佐川の娘を招待したので来るよとの父の命令を伝えに兄がやって来た。旅に出る金もなくなり、実家に行かざるを得ない。佐川の娘は薄紅の頬に大きな目、華やかな印象であるが口数少なく、芝居や小説の話題にも関心を示さなかった。

72-75

佐川の娘の品定めが済み、父はこの縁談が決まったも同然のようだ。数日後、父の命令で代助は彼女らを駅まで見送りに行く。父と絶縁すれば財源が途絶え、残るのは自然の愛だけだ。代助は落ち着かず、赤坂の待合で一晩過ごす、翌日また三千代に会いに行ってしまう。三千代はダンスの中から、昔代助が贈った指輪を見せた。先日のことは平岡に話していないという。夫に対し三千代を罪人にしてしまったが、平岡に責任がないわけではないと代助は思った。

76-80

平岡と三千代との間を取り持ったことを代助は後悔した。三千代になぜ奥さんをもたらさないのかと聞かれたが、考えれば三千代と自分の間に愛が通わなかった時期はなかったのだ。経済的窮状を心配し、平岡を新聞社に訪ねた。社会の内情に接する仕事柄、代助の家の会社の内幕も書けるとにおわせる平岡に一種の憎悪を感じる。平岡は、三千代は三年前とは大分変わった、家に帰ってもおもしろくないという。そんなに家が嫌なら奥さんを取っちまうぞと代助は知らせたかった。

81-85

天意にはかなっても、人の掟（おきて）に背く恋は主人公の死で初めて社会に認知される。その悲劇を思うと恐ろしい。しかし、自分が縁談を受け入れ、既婚者になったとしても、それが三千代との間を隔てるものとはならないだろう。代助は縁談を断ることに決めた。実家で接客中の父を待つ間、日本中捜しても好きな人なんていないのだから、家族の薦めで結婚すれば丸く収まるという兄嫁に、代助はついに「私は好いた女があるんです」と言い切った。

86-90

この日父に会えなかったが、次回のために代助は心を固めておきたかった。大きなユリをたくさん買って部屋に生け、三千代を呼びにやった。「何か御用なの」と問う三千代に、彼女の兄・菅沼が存命中の頃を思い出すためユリを用意したと話す。菅沼は妹をかわいがり、趣味の分野の教育を代助に任せた。三つどもえの関係が一つになる直前で1人が欠けバランスが崩れたのだ。この5年間を語り合い、「僕は、あの時も今も、少しも違っていやしいのです」と告げた。

91-95

「僕の存在には貴方（あなた）が必要だ。どうしても必要だ」とたたみかける代助に、三千代は泣いた。なぜ捨てたのかと問い、「残酷だわ」とつぶやく。世間的には罪でも、三千代の前にざんげできることが代助はうれしかった。平岡を愛しているのか、平岡は彼女を愛しているのかとの問いに答えはなかったが、不安も苦痛も消えた表情で「覚悟を極（き）

めましょう」という三千代に代助は震えた。戦う覚悟を決めたら、代助は一日も早く父に話したかった。ようやく父から連絡が来た。

96-99

実業の不安定さから地方の大地主との縁組の必要を説く父を気の毒に思ったが、代助は断る決意を伝えた。理由を問う父に答えないまま、ついに父からもうおまえの面倒をみないと宣告される。援助が断たれば生活のために職業を探さねばならない。自分が精神の自由を失う状況に三千代を道連れにすれば、その美しさを曇らせてしまうかもしれない。「貴方はそれほど僕を信用しているんですか」、改めて問う代助に、信用せずにこうしてられないと三千代は答えた。

100-104

実家の援助を失えば物質的な責任を果たせないという代助に三千代は、死ぬ覚悟がある、殺されてもいい、長く生きられる身体ではないのだと声を上げて泣いた。代助は平岡に会わねばと手紙を出したが、一向に返事がない。様子を聞きにやったところ、三千代が病気だという。翌日平岡がやってきた。会社を休んで看病していたが、病床の三千代が涙を流し、謝らなければならないことがある、代助にそのわけを聞いてくれと言う。君の用事と関係があるのかと平岡は尋ねた。

105-109

代助は三千代との経緯を話し、平岡の制裁を受ける覚悟を伝えた。それならなぜ3年前に取り持ったのだと平岡は声を震わせ、彼より先に三千代を愛していたという代助の告白にぼうぜんとする。平岡は代助に三千代を「遣（や）る」と言うものの、病気が治るまでは訪問を禁じ、彼女の亡きがらだけを見せるつもりかと代助は取り乱す。平岡から父に宛てた手紙を持って、兄が訪ねてきた。書いてあることは本当だと認めると、なぜそんな馬鹿なことをしたのだと兄はあきれた。

ストーリー

長井代助は大学を卒業しても就職せず、一軒家を借りて、書生の門野と賄いのばあさんの三人で暮らしていました。生活費の一切を父と兄に頼っているのです。

そうした代助の元に、三年ぶりに平岡常次郎と三千代の夫婦が上京してきました。代助と平岡、三千代は学生時代からの友達で、大学卒業後、平岡は三千代と結婚したのです。

平岡夫婦はこの三年ですっかり変わっていました。平岡は仕事上のトラブルに巻き込まれ、借金を重ねたあげく辞職に追い込まれ、上方から東京に逃げて帰ってきたのです。三千代は子どもを産んだのですが、その子供もすぐに死んでしまい、この時腎臓を患って、それ以後は病弱のままなのです。

代助は病弱の三千代が不憫でたまりません。しかも、平岡との間もしっくりいかなくなり、三千代が寂しい生活を送っていると知ると、代助は美馬まで隠してきた三千代への恋情を抑え込むことが出来なくなります。実は平岡に頼まれて、義侠心から三千代との間を取り持ったのは代助自身だったのです。

丁度そのころ、父から新たな見合いの話が持ち込まれます。父の恩人である。資産家の佐川の娘です。陰りを見せてきた長井家を建て直すには、どうしてもこの結婚が必要だったのです。その結婚を断って、三千代との愛を貫くことは、当時姦通罪があったのですから、社会的に完全に葬り去られることを意味します。

ついに代助は自然のままに生きようと決意します。本当は当初から三千代のことを愛していたのですが、友達のため自分を偽って間を取り持ったために、平岡も三千代も不幸になったのです。そこで、とうとう三千代を呼び出して、本心を打ち明けたのですが、三千代は「何故棄ててしまったんです」と言い、「残酷だわ」と呟きます。そして、「覚悟を決めましょう」と言ったのです。

代助は直接平岡に「三千代さんをくれないか」と頼むのですが、平岡は三千代を代助に合わせることをせず、逆に彼の裏切りを代助の父親に密告します。父と兄から勘当された代助は職を探しに家を飛び出し、狂気のように回転する赤色の世界に呑み込まれて行きます。

読みのポイント

「吾輩は猫である」「坊っちゃん」では善意という道徳が作品世界を支配していましたが、ここに至っては人間の作った道徳や法律よりも、それを冒してまでも愛を貫こうとする男女に、漱石は優しい視線を向けます。それがなぜ人の心を打つのかというと、漱石は「自然」という言葉を用います。代助は「自然」に逆らったから、罰せられたのであり、今、再び「自然」に戻ろうとしているのです。社会的正義をふりかざす人間よりも、たとえ道徳をおかそうとも人間の精神の深いところに関わろうとする人間に漱石は寄り添っていきます。

しかし、そこには社会的制約が待ち構えています。平岡は結局三千代を彼女の病気を理由に代助と引き離し、代助の父親に事の真相を手紙で知らせます。激怒した父親と兄は代助と絶縁し、経済的援助も止められてしまいます。

代助は生まれて初めて仕事を探そうと家を飛び出したのですが、その時の乗車がこの赤い炎の描写です。「火のように、熱くて赤い旋風「の中に開店し続けるのは代助の「頭」であって、やがて世界全体が真っ赤になっていきます。もちろん現実の世界が焼けるのではなくて、これはあくまでも代助の主観的な世界であり、息もつかないほどの精神的苦痛を比喩的に表現したに他なりません。

すべてが赤く埋め尽くされた世界。代助の眼を通すと、世界のすべてが真っ赤に燃え上

がったというのです。片時も三千代を忘れることが出来ない。しかし、その三千代は今平岡の傍らで死んでいこうとしているかも知れない。

代助の胸は激しく恋い焦がれます。その時の狂気にも似た世界を漱石は描いてみたのですが、この時、代助が「世の中が動く」と独り言を言ったことに注目すると、今までの代助は高等遊民で、社会と積極的にかかわろうとしなかったのですが、これからは社会と否応なく対峙していかなければならなくなります。

まさに代助の世界が変わったのです。